

ROOTS
in
WAKAYAMA

紀伊半島への 道程は、 信仰の道。

まるで異界から眺める景色のような熊野川の雲海。

物語の原郷 熊野から 旅が始まる

熊野は「モノ」宿る聖地であり「物語」発祥の地である。語るとは、「形あるものにする」という意味で、物事を順序立ててわかりやすく説明することをいう。では「物」とは何だろう。

英語ではthingやgoodsなど目に見える「物」を意味する場合が多いが、日本語本来の「モノ」とは「物」ではない。生き物、化け物、物腰、物心がつくやモノ珍しい。他にも、もののけや「なになにしたいたいものだ」など。つまり回想や記憶、目に見えない様々な「モノ」をさす。これらは我々人間の身体に宿る「心」とも言い換えられる。本来身体の中にあるべき「心」が、何らかの事情で外に出てしまった物を「モノ」と呼ぶ。

言葉は、文字を持っていない古くの人にとって「モノ」であった。目には見えないが声にして聞けば分かる「モノ」であった。日本語には言葉が宿るといわれる所以である。日本語はその言葉の音に漢字を当てはめて作られた。文

字を持つということは、権力を持つことであり、国の礎である歴史を築き、未来に対して継承することができるということであった。こうして読み書きできる文化が様々な物語を創造した。

あの世とこの世の間にひっそりと佇む、未だ成仏していない魂を落着かせ、なだめる場所が熊野である。まさしく「もののけ」などといった目に見えない「モノ」たちの鎮魂が熊野への旅である。癒し鎮められる人々の思いが堆積し、熊野は日本のみならず世界でも類を見ない魅力ある聖地となった。

現世の安寧を願い、平安時代末期の後白河法皇は歴代最多の34度も行幸したという。熊野比丘尼たちは、幾多の奇跡や逸話が織り込まれた物語を日本中で語り、熊野信仰を広めた。そうして熊野詣は皇族のみならず武士や庶民たちにも広がり、「蟻の熊野詣」と呼ばれる程、多くの人々が熊野に旅した。信仰は旅の始まりでもある。

辻原登 TSUJIHARA Noboru

つじはらのぼる

1945年和歌山県生まれ。デビュー作は1985年の中編小説「犬かけて」。1990年「村の名前」で芥川賞、2012年「鞭鞭の馬」で第15回司馬遼太郎賞、2013年「冬の旅」で伊藤整文学賞を受賞。



毎日芸術賞受賞長編小説「許されざる者」など著書多数。



左／高野山町石道は高野山の麓にある慈尊院から山上へ通じる表参道。弘法大師が高野山を開山して以来続く信仰の道。右／熊野古道は京の都から熊野三山へと通じる参詣道。室町時代以降は、武士や庶民の参詣も盛んになった。

